

# マイ・ハッピー・バースデー

さいとうみち子

むかしむかし、ある森の小屋に、可愛いお姫様が三人の妖精と住んでいました。

土曜日の始発前でも、駅の上りホームは白いワイシャツを揃って肘まで捲り上げたサラリーマンで溢れかえっていた。そこに間違ったように紛れ込んだ私は、ハンドバッグ一つの軽装で化粧もしないまま、寝ぼけ眼で赤い電車を待っていた。夏至を目前にした六月の朝は曇り空の下ですらすらすでに明るく、梅雨に向かおうとする白い空気にはまだ若干冷気を感じる。私の一日はこうして始まる。

私の「物心」——つまり一番古い記憶——は、二歳の誕生日から始まる。ただし一つ言い添えておくと、その「記憶」は、実際、父の愛情に満ちたビデオカメラのレンズを通してしっかりと映像に焼き付けられたそれと全く同じでもある。タイトル「みち子の記録」と付されたビデオカセットは、私の二歳の誕生日から始まるのである。

リビングの中心に据えられた座卓に、ホールサイズの立派な苺のショートケーキが鎮座している。ホイップクリームはまるで綿雪のようにいじらしく、苺は自然の産み出した赤い宝石として艶めかしく輝いている。誘惑された幼い私は、もちろん気にも留めないふりをしている。部屋の四隅を行ったり来たり。だがそのたびに、テーブルの上の白い美女にちらちらと熱い視線を投げ掛けているのはばれればである。気まぐれにちょっとテーブルへもたれ掛かってみる。今度は両手をついてためつすがめつ、彼女のご機嫌をうかがってみる。そしてついに、できそこないのソーセージみたいな私のぷっくりした人差し指が、クリームのひと山にひょいと伸びる。今だ。ぺろりっ。

「あ！ まだまだ！」

近すぎるマイクに拾われた父の声は、海底から響いてくるように深く温かだ。はて、わたし、そんなにおてんばしたかしら。

確かに詳細な記憶は、このようなビデオ記録に頼っているかもしれない。だが私自身の中にもまた、ビデオには決して残すことのできないこの日の記憶がくつきりと刻まれているのも、同じくらい確かなことだ。

二歳の誕生日を迎えた私は、何より恍惚としていた。母がこの日のために用意してくれた本物の「ドレス」——単なるお出かけ用のワンピースなんかではなく——を着たこと。しかしその途端、取り除き損ねた待ち針に背中をちくりと刺されたこと。その痛みすら、その日の私には勲章だったこと。あんなに豪勢なケーキを一瞬で平らげてしまい、もつと味わえばよかったと後悔したこと。そしてそんな一日を、父と母と祖母の三人が揃って、私のためだけに祝ってくれたこと。私は自分を、深い森の小屋で一六の誕生日を三人の妖精たちに祝われる、メルヘンのお姫様に重ねた。この日、王女みち子が誕生した。

週末早朝の電車は各駅停車だ。私はこれからそれを何本も乗り継ぎ、二時間以上をかけて成田空港まで向かわなければならなかった。だが苦痛はそれほどでもない。空港で出迎えるのは、ヨーロッパから一時帰国するボーイフレンドなのだ。七夕伝説ではないが、留学中の彼とは毎年夏休みの数ヶ月間だけ、日本で共に過ごすことができる。ただ最近、織姫と彦星の時代よりは相当便利になっているから、時間と空間が遠く二人を隔てていても、私たちは毎日のように電子メールを交わしたり、時にはウェブカメラで相手の顔を見ながら、無料で会話したりすることもできる。そんな最新の通信技術にも恵まれ、私たちの遠距離恋愛ももう丸三年になろうとしていた。

あの輝かしい二歳の誕生日のあと、私はすでに二十回以上の誕生日を経験してきているが、そのうちでもはつきりと覚えているのは、翌年の三歳の誕生日と、その次は随分飛んで、二四歳の誕生日だけである。

私の三歳の誕生日は、それはひどいものだった。幸か不幸か、その日の様子はビデオにこそ残ってはいないが、私は二歳の誕生日以上に、その忌まわしい日のことを明瞭に記憶している。

「いやだ、三歳になんかなりたくない！」

当日、家族が同じ敷地内の祖母の家に集まり、さあお祝いというまさにそのとき、私は突然泣き喚き、家中を絶望的に駆け回ったのである。がらんと広い一階建ての古い家に、悲痛な泣き声だけが大仰に響き渡った。

「わたしはずっと、二歳でいるんだ」

私を内側から突き動かしていたのは、底知れぬ嫌悪であり、恐怖だった。あの目の前に見える壁を突き破れば、この悪夢から目覚められるかもしれない。私はひたすら逃げ道を探した。二歳のままでいられる抜け穴を。しかしやがて私は悟る。たとえ障子を破り、廊下を抜け、壁を乗り越えて祖母の家から脱出したとしても、そんな逃げ道などありはしないのだと。私は立ちすくんだ。そしてますますやるせなくなつて、私はより大声で泣いた。

要はわがままが過ぎただけのことだったのだ。あの、おとぎ話が我が身の出来事となつた二歳の誕生日こそが自分の受けてしかるべき祝福であると思ひ込んでいた私にとって、三歳となつたその日は、何かの間違ひだと思ひえなかつた。まず父は、その日は仕事に出ていて不在だった。ビデオがないのもそのためだ。娘の誕生日よりも大切なのは、その娘を食べさせていくための仕事なのである。次に、祖母の家のダイニングテーブルに準備されたのはお城の様なケーキではなく、手作りのお赤飯だった。今や私も祖母の赤飯を心から愛しているが、当時の私にはそのご馳走も大人の味覚に過ぎた。

「あらあら、どうしたのかねえ」

優しい祖母は困つた顔をしながら悲しそうに苦笑した。何か悪いことでも言つたかしら、と。

さらにその日私はよりによって、大嫌いなキュロットスカートを穿かされていたのだ。娘のドレスを裾上げしてくれるはずだった母が、突如現れた「怪物」の相手に忙殺され、そんな暇も持たなかつたからである。

「ほら、泣いたらせつかくのお姫様が台無しよ」

しかし母は抱き締めてくれるどころか、私の涙を拭ってくれさえしなかつた。なぜならその愛おしい腕は、「弟」という存在に宿命的に独占されていたから。

私が三歳を迎えたまさにその日に目にしたのは、妖精の魔法でも、美しいドレスでも、頬の落ちそうなケーキでもなく、あの色のない日常の延長だったのだ。それは生まれて初めて「現実」を突きつけられた瞬間だった。日曜日の朝に布団を強引に引き剥がされたような感覚だった。私もそれに暴力的に対抗したのだ。引き剥がされる布団が千切れそうになつても、無理やり布団を奪って頭から被ろうとした。毎年だつて、何度だつて、二歳の誕生日を祝いたい。そのためなら、一生布団の中

で目覚めないまま、夢の中で腐るように生き続けたって構わない。しかし結局はうまくいかなかった。それは私自身、あの二歳の誕生日から一年かけて、子どもなりにも「現実」に背いて生きることが「良くない」と判断できるまでに「成長」してしまっていたからだ。時は不可逆だ。もう二度と二歳の誕生日には戻れない。王女様であった私も変わってしまう。私は未熟な自己像を喪失する。かつての私は「夢」となる。そしてついに、無味乾燥で甘くない大人の現実と向き合わざるを得なくなる。しかし私は知る。その新しい現実を自分のものとして受け入れることこそが、年を取るということであり、すなわち「誕生日を迎える」ということなのだ、と。

ようやく成田空港へ着いた時には、彼の飛行機の到着時刻を一時間も過ぎてしまっていた。駅のホームから息を切らしてエスカレーターを駆け上ると、到着ロビーのベンチに手持無沙汰で座る懐かしい横顔が目に入った。

「遅いよ。もう三〇分待ったよ」

「ごめん、ごめん。だってこれが始発の電車だったんだから」

一年ぶりの再会は、まるで昨日会ったばかりのような素っ気ない会話と、同時にまるで初めてのデートのようなぎこちない手の繋ぎ方で彩られた。どんなにバーチャルコミュニケーションが発達していても、リアルなそれには敵わない。彼の肉声を聞き、彼の匂いを吸い込み、彼の体温をしっかりと感じる。

「おかえり」

「……ただいま」

大人は夢に生きることができない。だが、大人は夢を「作る」ことができる。年をとるたびに厳しい現実には壊される幼い夢の数だけ、その現実には耐えうる夢を、自分の手で作り上げることができるのだ。

「今日、何の日か知ってる？」

「え？ 何の日だっけ？」

実家を出てひとり暮らしをする私の家には、もはや一人の妖精もいない。まして古いドレスよろしくワンピースを着回しているような私に、王子様など来てくれやしない。そもそも王子様なんていないのだ。それが今の私の現実だ。しかし、現実の私は大人だ。王子様がいないなら探せばいい。私と同じように、自分で夢を作り続ける現実の大人の王子様を。そして自分から、その王子様に会いに行けばいいのだ。

「もう、知ってるくせに、ねえ、何の日？」

本当の「夢」とは相対的なものかもしれない。現実があるからこそ、夢が存在しうる。

「はいはい、お誕生日おめでとう」

だから大人になるのも、そう悪いもんじゃない。

夜には雨が降るそうだ。王女は生まれて初めて、愛する人と自分の生まれた日を祝う。

私の二四歳は、こうして始まる。